
堂々乙女の冒険ー敬老の日の一件

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堂々乙女の冒険―敬老の日の一件

【Nコード】

N9567N

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

優と佳恋が家族旅行に出かけてしまい、一人では怖くて眠れない鈴音は優のアドバイスで悟の元を訪れた。この鈴音の冒険が事件を引き起こし・・・？

堂々乙女の来訪

「なあ、鈴。何で俺の部屋に来たんだ？」

俺は家にながったばかりの客人に訊ねた。彼女・大学生でありながら超巨大アパレルブランドKAGURAの社長を務める神楽鈴音は俺の親友・栖川優の恋人である。恋人がありながら、夜、男の部屋を訪れるとは何事か。俺は驚いていた。

「優さんが旅行に出かけてアパルトに戻らないんです。佳恋さんから聞いたでしょう？」

優は姉でモデル、そして俺の恋人ということになっている佳恋さんとともに家族旅行へと出かけている。確かに佳恋さんから話は聞いていた。

俺がロシアからもどってきて半月ほど過ぎた。茂木のことについて加熱した報道が続く中、被害者保護という言葉のもとに俺の周りには比較的静かだった。とりあえず佳恋さんや優、鈴音の出入りも黙認されている。まだ佳恋さんと俺が交際していることは大々的には報道されていないかった。

「優が居ないからって、何で……」

「私、一人じゃ眠れないんです」

普段は同じアパートの隣同士の部屋でラブラブ生活を送っている優と鈴音。どうやら夜は一緒の部屋で寝ているらしい。これは単にラブラブだからということではなく、鈴音が一人では寝られない体質だからだ。

話は半年ほど前に遡る。鈴音の家族は自動車事故で全員亡くなった。鈴音はショックから数ヶ月の間記憶喪失状態であった。記憶が回復した今も事故の影響は残っており、その一つが一人で眠ることができない、というものである。確かに寂しさや恐怖心から寝られないのはわかる。

「ま、まさか俺に同じ部屋で寝ろって言うのか？」

「お願いします。頼れるの、悟さんしかいないんです」

「鈴、よく考えてみる。優がこのことを知ったらどう思うか」

いくら親友とはいえ、自分の彼女が別の男と寝たなんて聞いたなら、優も怒るに決まっている。しかし、鈴音は顔色を変えずに続けた。

「優さんに相談したら悟さんを頼れと仰いまして。」

「そうか…。まあ、鈴が良いなら一緒に寝てやるけど」

そういうことなら話は別だ。親友の頼みは断れない。難しそうな顔をした俺に、鈴音はニコリと笑いかけた。

「そう言う悟さんも一人で眠るのは得意じゃないんですよね？佳恋さんからも頼まれましたよ」

「そういうことかよ…ははは。佳恋さんらしいや」

佳恋さんもあいかわらず俺のリスカ癖は気にしているのだ。

「悟さんは優しいから、絶対変なこととはしないって」

どうやら俺はみんなから信頼されているらしい。確かに女の子が泊まりに来たからといって変な真似はしないが。

「ありがとな、鈴。俺のこと、信じてくれて」

「もちろんなのです。あ、これは一緒に食べようと思って作ってきたプリンです。よかったらどうぞ」

俺達はふたりでプリンを食べながらお互いの恋について語り合った。そして、日付の変わらないうちに布団に入った。

ふたりの夜

「うう…えぐ…」

真夜中、俺はすすり泣きを聞いた。

「鈴？」

近づいて見てみると、鈴音は布団の中で泣いていた。眠っている。悲しい夢でも見ているのだろうか。突如鈴音は起きあがるところからを向いた。

「お父さん…」

そう言って鈴音が俺に抱きついてきた。突然のことになすすべもない。

「もつどこへも行かないください。鈴をひとりにしないでください。お父さん…」

どうやら寝ぼけているらしい。彼女は痛ましい事故で、一瞬にして四人の家族を失った。その悲しみはそう簡単には消えない。夢に見ることもあるのだろう。俺は鈴音の手に触れた。

「優はどこにも行かないから、安心しろよ、鈴…」

静かな寝息が聞こえる。どうやら悪夢は終わったらしい。ぎゅっと握られた手を離れたら起きてしまっただろうか。俺は膝枕の体制のまま、夜を過ごした。

俺は正座したまま朝を迎えた。鈴音は起きたら何と言っただろうか？俺は彼女の顔を見ず、天井を仰いだ。

「んっ…」

鈴音は目を開いた。俺の手を握りしめ、膝枕をしてもらっていることに気づく。一瞬の間を置いて驚く。おそらく顔を見れば一睡もしていないのがわかるだろう。彼女は飛び起きた。

「悟さん…私…」

「あ。おはよう、鈴。よく眠れた？」

俺は気にしていないふりをして微笑んだ。

「ごめんなさい、一睡もできなかったですよね…」

「気にしないで、慣れてるから」

鈴音は立ち上がる俺のシャツの裾を掴んだ。

「…そんなこと、言わないでください」

「鈴？」

「悟さんは一人じゃないです。私も、優さんも、佳恋さんもついてます。だから…」

「ありがと。三人のおかげで最近は大いぶ眠れるようになってきたんだよ」

俺は鈴音の手を取って言った。

「よかった…。あ、私、朝食作りますね！」

鈴音は手を握り返して微笑んだ。

祭りの日

「今日はどうするんだ？」

「え？」

鈴音の作った朝食を食べながら、俺は唐突に切り出した。

「優が帰るまで、どっか出かけるのか？」

「ええと…特に考えてませんでした…」

「俺は今日用事があるって出かけるんだよ。だから鈴はどーすんのか
なっつて」

「用事…ですか」

鈴音は残念そうにうつむいている。やはり一人にするのはよくない
ようだ。

「俺の昔のダチが老人ホームで働いてて、今日はイベントの手伝いを
頼まれてるんだよ。鈴を一人にするのもあれだし…ついて来るか
？」

「いいんですか！」

「ああ、もちろんだよ」

昔のダチ、つまり岸川晃と幸子のことだ。彼らが働いている老人
ホームで敬老の日のイベントがあるという。俺は手伝いがてら観に
来ないかと誘われていたのだ。鈴音をバイクに乗せて出かける。深
緑園という名にふさわしく、その老人ホームは山に囲まれた静かな
場所にあった。

「ヒカル！サチ！」

受付の準備をする二人を見つけて声をかける。

「悟うー時間ぴつたりだなあ」

「あれ？悟ちゃん、こないだと違う女の子…」

サチはやはり敏感だ。すかさず俺は説明を加えた。

「あ、この子は神楽鈴音。友達の彼女だよ」

「不倫？」

ヒカルは考えた末に一言そう言った。思わず吹き出すサチ。

「何言つてんのよヒカルちゃん。結婚してたら不倫だけど、まだ悟ちゃんは結婚してないのよ」

「そっか〜浮気か〜」

納得したようすのヒカルに、俺は慌てて訂正をした。

「浮気じゃねえよ。鈴音は俺の彼女の弟と付き合ってるの」

「複雑で俺にはよくわかんないなあ」

困った様子のヒカルにサチは簡単なせ説明をした。

「悟ちゃんと神楽さんは未来の兄妹なのよ」

「そっか〜悟に妹ができたのか〜」

「ごめんねー、ヒカルちゃん頭悪くて」

「そ、そんな」

鈴音は首を大きく振った。

「昔から変わらないもんね、ヒカルの天然ボケ」

俺は思わず笑った。サチもつられて笑う。

「私はそこに惚れちゃったんだけどね〜」

そこに遠くから呼びかける声がした。

「ヒカルくん、幸子ちゃん、準備できたかな？」

「はい、園長お！」

ヒカルはまるで小学生のように手を上げて答えた。近づいてきたのはこの老人ホームの園長だった。白髪混じりの人の良さそうな男性だ。

「ヒカルくんはいつも元気だねえ」

「元気が一番ですからあー」

「それから…お二人がお手伝いかな？」

園長は俺達の方を見た。すでに話についているらしい。

「はい、私たちの親友の桐原さんと、そのご友人の神楽さんです」

「今日は地域の皆さんにこのホームを開放してお祭りをするんだよ。」

二人には入り口の受付をお願いしたい」

「わかりました」

俺が答えると園長は手を差し出した。

「よろしく頼むよ」

がっちりと握手を交わし、俺達は持ち場についた。

狙われた乙女

9時の開場とともに、地域住民が次々と園を訪れる。どうやらこのあたりでは浸透している祭りのようだ。俺と鈴音は来場者にパンフレットを渡す仕事を任された。

一時間ほどが経過した頃、受付に現れたのは深く帽子を被りマスクをした怪しげな男だった。俺は少し身構えた。男は背中に隠していた猟銃をこちらに向けた。

「手を挙げる！門を閉める！従わないと、撃つからな」

悟と鈴音はすぐに両手を挙げた。

「俺はただの手伝いだ。ここの職員を呼んで閉めてもらってもいいか？」

職員を呼ぶ間に警察に連絡しようと考えたのだが、そんなことは見透かされていたようだ。男は銃をこちらに向けたまま動かない。

「手伝いだろうが門くらい閉められるだろう？早くやれ！でないとこいつを撃つぞ」

猟銃は鈴音に向けられていた。

「悟さん……」

鈴音の顔が強張る。佳恋さんなら「撃てるものなら撃ってみろ」と挑発するだろうが、鈴音にはそんな余裕はみられない。

「わかった、やってみる」

俺が門を閉めると、男は鈴音を盾にして歩き出した。

「お前、全員を一カ所に集める！」

「わかりました」

俺はちらつと鈴音を見た。男に腕を掴まれ、怯えている。周囲の人々は銃に驚き、俺の言葉を聞いてくれた。

「食堂に集まってください…あの人の指示なんです」

食堂には100人ほどが集まった。男は鈴音から離れない。

「どこかで見たことある顔だな…名前は何だ？」

「神楽鈴音です…」

鈴音は震える声で答えた。

「ああ、KAGURAの社長じゃないか。いい人質が居たもんだ」

犯人は小さく笑った。

「お前」

犯人は俺を呼びつけた。

「人質はこいつだけで充分だ。他の人間は解放してやる。戸を開けな」

「わかりました」

俺は食堂の扉を開いた。人々は一斉に外へと走り出した。ほんの数分で部屋には犯人と鈴音、そして俺だけになった。

「お前も出ていいぞ」

犯人は縄で鈴音の手を縛ろうとしていた。その泣き出しそうな顔に俺は動けなかった。

「なあ、俺を縛れよ。そいつに少しでも傷がついたなら、KAGURAは黙ってないだろ」

「だが、こいつが逃げ出したら意味がないだろう」

男は手を止めてこちらを向く。

「俺が縛られて、逃げ出せるか、鈴？」

鈴音は首を振った。

「悟さんは逃げてください…人質は私だけでいいんです…」

その鈴音の言葉に犯人はニヤリと笑った。どうやらこちらの考えが通じたようだ。

「お前の案を採用しよう」

犯人は俺を椅子に縛り付けた。向かいに鈴音が座る。

「ごめんなさい。私のためにこんな…」

「別に、慣れてるから」

俺は笑顔を作ってみせた。保澄組や茂木の事件で何度も誘拐され、監禁されたことを考えれば、このくらいはたいしたことないだろう。

「そんなこと…言わないでください…」

すでに鈴音は泣きそうだった。

「そんな顔しないでよ。優が悲しむよ」

「優さん…」

「きつと心配してるよ。人質にKAGURA社長って、報道されるだろうからね」

「報道…？」

鈴音は気づいていなかったようだ。犯人は重大なミスを犯したのだ。

「さつき逃げた奴ら、きつと情報を流しているよ」

「お前、五月蠅いな」

犯人は俺に近づくと、ガムテープで口をふさいだ。俺は犯人を睨みつけた。次の瞬間、犯人は椅子を蹴り倒した。身体が床に打ちつけられる。

「やめてください！」

鈴音は犯人の腕を掴んで叫んだが、犯人は何も言わずに立ち去った。鈴音は椅子を起こしてガムテープを外した。開口一番、俺は小声で忠告した。

「鈴、テープは外すな」

「でも…」

「鈴までこういう目に遭ったら嫌だからさ。変な真似しないほうがいい。起こしてくれてありがとう」

「ごめんなさい…私のせいで…」

鈴音はテープを貼り直した。

世話焼き男子の作戦

「本日午前十時頃、老人ホーム・深緑園に猟銃を持った男が押し入り、人質をとって現在も立てこもりを続けています。深緑園では地域との交流を図るため、秋祭りを開催しており、この祭りを訪れた地域住民やボランティアスタッフが事件に巻き込まれました。会場から逃げた方によると、人質にアパレルメーカーKAGURA社長・神楽鈴音さんが含まれているようです」

旅先で聞いていたラジオ。私は耳を疑った。

「優、これ…」

「鈴音が人質?!」

優の表情が一変した。

「なんで鈴ちゃんか老人ホームに? 悟くんと一緒のはずじゃ…」

鈴音のことは悟に託してきた。悟がそばに入れば安心と思っていたのだが、二人は別々に行動しているのだろうか?

「悟も人質になってるかもしれないよ、姉さん」

優は厳しい顔をしてこちらを向いた。

「佳恋、優、どうする?」

列車を待っていた父がこちらを向いて問いかけた。私の心は決まっていた。

「KAGURAのオフィスへ行ってみましょう! もしかしたら情報が入ってるかも」

食堂の時計からチャイムが鳴る。事件発生から一時間ほどが経過していた。その時、電話が鳴った。どうやら警察が交渉を始めるらしい。

「人質は神楽鈴音と、もう一人…名前は?」

「桐原悟です」

男の問いかけに鈴音が答えた。

「キリハラサトルって男だ。変な真似したら二人とも殺す！」
ガチャリと電話を切って、男は俺のほうを向いた。

「何か言いたそうだな」

足音を立てて俺に近づくと、勢いよく口をふさいだガムテープをとった。俺はすぐに話し始めた。

「テレビ局も警察も、情報つかんでたる？あんたはKAGURAと直接交渉したかったんだろうけど、もうKAGURAにも警察がいるはずだよ。全て警察に筒抜けで、これからどうすんの？」

「人質がいるんだ。警察も簡単には動けないさ」

「甘く見ちゃあいけないよ、園長さん」

「園長さん…？」

鈴音が目を丸くした。

「何だつて？」

男は俺の襟元を掴んだ。俺は続けた。

「園長さんでしょう、あんた。入所者やスタッフと違って初対面の俺たちならバレないでも思ったの？」

俺ははじめからわかっていた。園長は計画を立てていたのだ。ヒカルとサチに友達を呼ばせる。その友達は桐原悟。俺の素性は報道で分かっているはずだ。モデルのカレンなり優なり、鈴音が同行する可能性も高い。人質としてちょうど良いのだ。

「お前…」

「やめてください！」

俺に殴りかかろうとする男を鈴音が制止する。男は手を止めた。

「キリハラとか言ったな、お前の言うとおりのようだな」

「何が？」

「この社長さんよりお前の方が人質にしておくのに丁度良いみたいだ」

「へえ、わかった？」

鈴音は震えを押さえて必死に立ち向かおうとしている。早く開放

してやりたかった。

「社長さん、あんたを解放しよう。こいつを解放してほしかったら指定の口座に金を振り込んで、それを証明できるものを持って来い。警察を連れてきたら、こいつの命は無いぞ」

男はメモを差し出した。鈴音はゆっくりと男に近づき、それを受け取る。

「鈴、気にすんな。警察を頼れよ」

「ふざけるな、お前死にたいのか？」

男は焦った様子でこちらを見ている。

「まあ、死にたかないけど、あんたの負けは決まってるから。だからすぐ警察に行くんだ、鈴」

「悟さん……」

鈴音は立ち尽くしていた。俺はもう一度声を出した。

「さあ、行くんだ！」

それを聞いて鈴音は駆け出した。男は計算が狂ったという様子で、椅子に座って頭をかいていた。

事件が事件を呼ぶ

「神楽鈴音さんですね。犯人からの指示は盗聴によって確認しています」

警察官はホームから飛び出してきた鈴音に声をかけた。

「やはり、警察には伝わっているんですね…。お願いです、悟さんを助けてください」

その声をかき消すように銃声が響いた。警察官たちがホームに向かう。

「突入！」

突入していく警官たちを鈴音は震えながら見ていた。

「鈴音！」

その時、警官たちの足音をかき消すように声が響いた。鈴音はすぐ声の主を認識した。

「悟さん！」

俺は警官の波をかき分けて鈴音の元へ駆け寄った。

「園長さん、すぐ捕まるよ。もう大丈夫だ」

鈴音は涙を流しながら俺の腕に触れた。

「さっきまで縛られてたのに…どうして…」

「言っただろ、慣れてるって。あんな縄、すぐ解けるよ」

「じゃあ、全て演技…？」

「そういうこと」

縛られたあと、犯人の目を盗んで少しずつ縄を緩めていた。そして、縄がほどけたところで俺は犯人が床に置いていた銃を手に取り、天井へ向けて撃つたのだ。それがきつと突入の合図になる。そう思っ

「良かった…本当に…」

形式的な検査を受けるために俺と鈴音は病院を訪れていた。そこ

にどこから情報をつかんだのか、優がやってきた。優は鈴音よりも先に俺の方を向いた。

「悟…！」

優は悟に平手打ちをした。

「何考えてんだよ。鈴音を危険な目に合わせて…」

すると鈴音が優に平手打ちをした。

「悟さんは悪くありません！優さんに責める権利なんてありません！」

「鈴音…」

鈴音は声を見捨てて後ろを向いた。

「優さんなんて大嫌い！」

そう言いつと走って逃げていってしまった。

「鈴」

俺は鈴音を追いかけた。しかし、優は呆然と立ち尽くすだけだった。

「優ちゃん」

優は後ろを振り返る。その顔を見て、優は声も出せずにいた。

「奇遇だねー。こんなところで会えるなんて」

君の本性

「五十嵐先輩：！」

そこに居たのは五十嵐亮。高校時代、優をいじめていた学校のボスだ。優を女だと勘違いして追いかけてまわっていたことから、今は大学全体で笑いものにされている。

「優ちゃんのせいで俺、馬鹿にされっぱなしなんだよ。優ちゃんは女装してたこと馬鹿にされたりしないのにな」

「それは…」

後ずさる優の腕を亮は強く掴んだ。

「許さないよ。ちゃんと謝ってもらわないとね」

亮は優を人目につかない場所へと誘導した。スタッフだけが出入りするようなスペースだ。優は恐怖で抵抗できずにいた。鍵の開いた部屋を見つけると、優を強引に押し込む。亮は後ろ手に戸を閉め、鍵をかけようとしたが、戸は完全に閉まらなかった。

「何だ？」

隙間に靴が挟まっている。靴の主は扉に手をかけ、ゆっくりと開けた。

「関係者以外立ち入り禁止ですよ、ここ」

「悟！」

優は顔をあげて叫んだ。亮は眉間にしわを寄せた。

「お前こそ関係者じゃないだろ」

亮の手が優の首を強く締め付ける。

「やめる気、なさそうですね。」

俺は後ろ手に鍵をかけた。

「何だよ、やる気か？」

それを見てようやく手を離し、ようやく亮は俺のほうを向いた。

優は倒れると同時に咳き込んでいた。俺は駆け寄りたいのをぐつと

こらえて向き合った。

「俺、一応検査受けに来た患者なんですけど」

へらへら笑う悟にしびれを切らし、亮はついに殴りかかった。しかし悟はそれを綺麗にかわした。

「くそっ」

「患者相手でこの様かよ。弱いものいじめで優越感に浸ってるだけじゃ、喧嘩には勝てないんだよ」

俺は亮の足を引っ掛けた。勢いよく倒れた亮の頭を靴で押さえ込む。

「こんなことして良いと思ってんのか」

「今までこういうこと散々やってきたんでしょ。俺は弱いものいじめだけは許せないんだよねー」

「この野郎……」

俺が力を抜くと亮は立ち上がって扉へ向かった。すかさず俺はその腕を掴んだ。

「なあ、あんただんだけこいつのこと苦しめてきたのさ。この程度で済むと思ってるの？」

「うっ……」

優は何度が咳き込んだあと、目を開いた。目の前で悟が亮に殴りかかっている。すでに殴られた場所に血がにじんでいる。優は痛みをこらえて悟の腕をとった。

「やめるよ、悟。やめろって」

しかし悟は手を止めなかった。それどころか今度は優を睨みつけて言う。

「お前も殴られたいのか？」

「えっ……」

「こいつがどれだけお前を苦しめてきたか。それを考えたらこのくらい当然だ。」

悟は優の胸ぐらを掴む。

「報復に意味はないよ」

優の言葉に悟は思案していた。その隙について亮は部屋を飛び出した。

「さつきは殴って悪かった…僕に悟を責める権利なんてない。こんなことまでさせてしまつて、本当にごめん」

すると悟はようやく手を緩めた。

「優の言うとおりだ。報復に意味はない…」

「悟…」

「それに、俺は優に殴られて当然だつたと思つてる。鈴音を誘つたの俺だから」

優は悟の手をとつて、小さく首を振つた。

「少し、嫉妬してたのかもな…。悟、格好良かったし」

「そんなことないよ。俺、鈴と話してくるわ」

悟が振り返つて扉へ向かう。優もその隣に立った。

「僕も一緒に行くよ。鈴音に謝らないとね」

二人はひとしきり笑い合つて、部屋をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9567n/>

堂々乙女の冒険－敬老の日の一件

2010年10月8日12時12分発行